アナウンサー・金子覚関係資料②
～占領下で発達した録音構成～

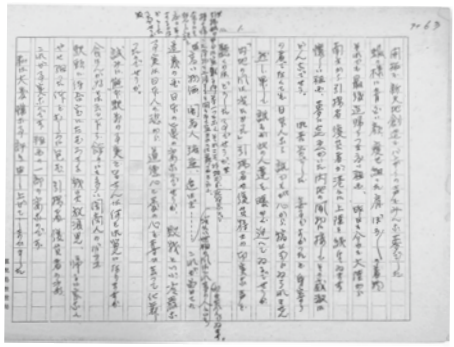
メディア研究部　島田匠子

はじめに

前回の2023年11月号では，戦中から戦後にかけてNHKのアナウンサーとしてラジオ放送に携わった金子覚氏が残した資料の中から，初期の録音放送に関する資料を紹介した。戦時中に登場した可搬型録音機によって，現地でインタビューや音声の収録を可能にした録音放送の手法は，戦後も番組制作に幅広く取り入れられ，さらに創意工夫が図られていく。今回は，スタジオでナレーションや背景音を加えて編集するなどして，一層，細かく構成された占領期の放送原稿に焦点を当てる。

緻密になる録音構成

金子氏は，1945年の終戦後も，それまでと同様，熊本中央放送局のアナウンサーとして，自ら現地に赴き取材を続けた。



『引揚者を迎へて』放送原稿（1946年）

上の写真は，そうした取材をもとに制作された特別番組『引揚者を迎へて』の原稿である。原稿用紙に手書きで記され，全5ページからなっている。内容は，1946年6月18日から始まった引き揚げ者や復員者のための「音楽慰問」について伝えるものである。音楽慰問は，鹿児島や宮崎に向かう引き揚げ者専用列車が熊本駅に停車した際に行われ，早朝5時45分の到着から発車までの1時間の停車時間を利用して，熊本鉄道管理部の労働組合有志が作る楽団が，童謡や軽音楽の演奏を行った。放送日や放送時刻は判明していないが，原稿と一緒に同封されていた新聞記事などから，同年6月下旬ごろに九州地方で放送されたと思われる。

放送原稿には，まず1枚目の右上に「アナ6分」と書き込まれており，次のようなナレーションが記されている。番組では冒頭部分で，当時の引き揚げ者の過酷な状況が説明されたことがわかる。

> **然し，果たして誰もが此の人達を暖かく迎へてゐるでせうか。「内地の風は冷たかった」引揚者や復員将士の切実な声を聴くのはどうした事でせうか。引揚船の中では盗難事件等一つもなく，それこそ外地より死ぬ思ひで持ち帰った荷物を上陸すると間もなく盗まれて仕舞ったと云ふ。余りにも悲しい話を度々耳にするのはどうした事でせうか。**

そのうえで番組では，音楽慰問の様子を，熊本駅で収録した音声とナレーションを組み合わせて表現していったことが，資料からわかる。原稿用紙には，シーンごとに録音のカットナンバーと思われる①～⑦までの番号が記され，その頭には「三分」など録音を流す時間の書き込みがなされている。以下は，原稿の一部を抜粋したものである（原稿は縦書きだが，横書きにし，ナレーション以外を太字にするなどの整理を行った）。

熊本の玄関，熊本駅で，私は今朝，その大きな愛を分ち与へる一部の人の涙ぐましい情景に接することが出来ました。ではこの美しい情景を録音と共にお話致しませう。

汽笛
人々がまだ覚めやらぬ，静かな夏の明方の夢路を追ふ時，こゝに又懐かしい故郷の夢を追って引揚列車が熊本駅へ入って来ます。

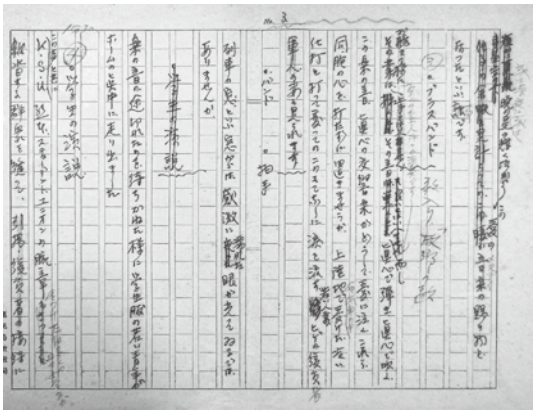
①晝間の雑踏がうその様に森閑とした早朝五時，列車が到着致しました。

汽車の音
どこからかゆるやかな楽の音がホームの一端から流れ出したではありませんか。早速マイクを近づけて見る事に致しませう。

三分
②　管理部員話 ブラスバンド（越後獅子）
人影まばらなホームも乗る人降りる人，行く人帰る人と人人人の波にもまれ乍ら，「熊本鉄道管理部労働組合引揚者慰問管弦楽団」と旗印もあざやかに額に汗して故国の情緒豊かな旋律を奏でて居ります。（中略）

③ブラスバンド　歌入り「故郷の歌」
お聴きの様に全くの素人作りの演奏です。而し，真心で弾き，真心で吹く，この楽の音，真心の交響楽がどうして愛に泣く，これら同胞の心を打たずに置きませうか。上陸地や汽車の中で受けた冷い仕打ちと打って変ってのこのもてなしに涙を流す若い人妻，ヒゲの復員者の姿も見られます。

バンド　拍手
列車の窓といふ窓からは，感激に濡れた眼が光ってゐるではありませんか。



構成が細かく書き込まれた原稿

上の写真に示したように，原稿用紙の枠外など，ところどころに波線が引かれている。これはボイスオーバーという編集方法を示すもので，録音を流している状態で，ナレーションを重ね合わせることで，周囲の音声だけでは伝えきれない現場の状況を解説する役割をする。また原稿には，「拍手」や「サヨナラの声」など，現場の状況についてさらに印象づける効果音などを入れるタイミングも書き込まれている。

おわりに

録音構成という手法は戦時中から取り入れられていたが，今回の占領期の資料からは，その構成がさらに緻密なものになっていったことがわかる。そこでは，ナレーションと現場の音声をより複雑に組み合わせつつ，聴取者に臨場感を抱かせる手法がとられていた。

こうした音声と音楽を駆使して組み立てられた録音構成は，その後の社会番組で多く取り入れられ，ラジオドキュメンタリーとして発展していった。次回は，さらに機動的になった録音手法を用いて，占領下で新たに始まった番組『街頭録音』に関する資料を取り上げることにしたい。　（しまだ しょうこ）